

投運動能力を向上させるための学習内容の再検討

—腕の振りに着目して—

馬場 晃次郎（信州大学）

1. 目的

本研究では、これまでの投運動に関する実践研究で用いられている投動作評価基準の見直しをすることを通して、投能力向上のための学習内容の再検討、焦点化を行うことを目的とする。

2. 研究方法

これまでに行われてきた投運動の研究や実践を次の2つの方法において収集する。1つ目は、体育科教育に関する辞典類、および体育科教育、教員養成課程を想定した体育課指導関係の書籍文献、さらにスポーツ指導者や投運動が苦手な児童のための書籍等から収集する方法である。2つ目は、インターネット上で「投運動」に関する関連ワードで検索し収集する方法である。集積された先行研究、実践において用いられている、投動作評価基準を見直すことを通じて投運動の学習内容の再検討をしていく。

3. 結果と考察

これまでの実践研究の多くで、外部から観察される投運動の動きの評価（投動作評価）と遠投距離の間の乖離が起きている。このことから「投動作評価基準」では掬い取られていない、ボールに力を伝達させるための重要な技能的要素が投動作の中にまだ潜んでいると考えた。改めて投動作の構造を明らかにし、投動作評価基準の分析を行った。

その結果、これまでの実践研究で用いられている投動作評価基準では「腕が振られる感覚」とそれに伴う「トップの肘の位置」が掬い取られていないことが分かった。投動作では助走やステップ動作で生み出した並進エネルギーが、踏み出し脚が着地することで骨盤が回転し回転エネルギーに代わる。この回転エネルギーが腕に伝わるために「腕が振られる感覚」が必要不可欠なのである。そしてこの感覚が身につけていないことが、外部から観察される投運

動の動きの評価と遠投距離との間の乖離が起きる原因だと考えられる。さらに、この感覚をつかむためにはトップ（踏み出し脚が着地した時の投げ腕の始点）で肘を、両肩を結んだラインの延長上（背中側）に引き寄せておく必要があり、この位置にあることで体幹の回転力を腕に最も伝えることが出来るのである。この「腕が振られる感覚」とそれに伴う「トップの肘の位置」が、子供たちが投運動学習を行う上で身につけるべき重要な技能であると考えられる。

4. 結論

今回の研究では、「腕が振られる感覚」とそれに伴う「トップの肘の位置」が投運動学習において、最初に身に付けるべき重要な技能であると述べてきた。しかし、これらの技能習得のための教材を作るには至らなかった。今後の課題としてこれらの好ましい動きを引き出す教材について研究が必要だろう。

5. 主な参考文献

- 1) 岩田靖 ボール運動の教材を創る ゲームの魅力をクリックアップする授業づくりの探求 大修館書店 2016
- 2) 金善應・松浦義行 幼児及び児童における基礎的運動技能の量的変化と質的变化に関する研究 走、跳、投運動を中心に 1988
- 3) 高本恵美・出井雄二・尾縣貢 小学校児童における走、跳および投動作の発達：全学年を対象として スポーツ教育学研究 2003
- 4) 滝沢洋平・近藤智靖 投動作の観察的評価基準に関する研究 小学校全学年児童の動作を対象として 体育科教育学研究 2017
- 5) 前田健 理論編ピッチングメカニズムブック ベースボールマガジン社 2010